

# インスタ映え時代の新観光形態としての 「住宅外壁画」の流行と傾向

—ナポリの低所得者層集合住宅街における巨大壁画群の事例より—

河村 英和

## Moda di street art come nuova forma del turismo all'era dei social network

—Gli esempi di murales sulle case popolari di Napoli e suoi dintorni—

Ewa KAWAMURA

**要旨**：1995年にユネスコ世界遺産に登録されたナポリ歴史地区には、猥雑で庶民的な雰囲気astreet artと親和性が高く、もともと無名人たちによって数多く描かれていたものの、とくに2015年以降からその質と量が急上昇し注目度も上がってきている。それはナポリ版バンクシーともよばれているナポリ出身の壁画家ヨリットが大聖堂近くで描いたナポリの聖人に似た《ジェンナーロ》という巨大な住宅壁画の出現と、やはり大聖堂の近くにあるバンクシーの2作目（1作目は消去され現存せず）がガラス板で保護された2015年という年が一つの節目であったようだ。それ以来、以前は観光客が近寄り難かった歴史的建造物がひしめく狭い路地の住宅街や、治安の悪い郊外の近代的な低所得層の集合住宅の壁を使って、有名な作家たちを起用することによって、奇抜で面白い作品が続々と誕生するようになってきた。それらは現在進行形で増加中で、フォトジェニックなストリートアートはSNSで拡散されやすい。ナポリ市や各種団体もその制作に積極的に協力しており、今まさにナポリの新しい観光形態を築いている途上といえるだろう。

**キーワード**：ストリートアート、ナポリ、ニューツーリズム、グラフィティ、現代美術

## 1. はじめに

イタリア国内の都市史学の近年の動向のひとつとして、ストリートアート研究が急速に盛んになっている。イタリア国外（とくに英米圏）ではもっと早くからその傾向があったが、イタリア内で制作されたストリートアートに関する学会発表や論文掲載が増えてゆくのは、2017年以降だろう。イタリア全土的な観点からみてストリートアートの派生を取り扱ったものから<sup>(1)</sup>、作家別か地域別（例えばシチリア、ローマ、ボローニャなど）に特化した関連書籍の出版も相次ぎ<sup>(2)</sup>、2019年にはさらなる盛り上がりを見せ、同年9月に行われたイタリア都市史学会（AISU）では、少なくとも3名の研究者がストリートアート関連の発表を行い、なかでもナポリ郊外の事例に焦点を当てたものが多かった<sup>(3)</sup>。おそらく「ナポリとその周辺に特化した」ストリートアートについての書籍が発売されるのはもはや時間の問題であろうが、このエリアではまだまだ現在進行形でストリートアートが続々と増加中であるのも実情だ。ストリートアートはもともとアウトサイダーなグラフィティ（落書き）と関係深いため、治安の悪い貧困地区を中心に頻繁に描かれてきた。そのような治安が悪い貧困地帯が多い南イタリアほど、ストリートアートの土壌が整っているため、ナポリの下町と郊外はストリートアートととくに親和性の高い恰好の土地といえるが、じっさいナポリよりもさらに貧しいエリアが存在するシチリア島パレルモでは、ナポリよりも数年早く、すでに2010年代以前に良質なストリートアートがかなり活性化しはじめていたのも偶然ではないだろう（Garofalo, 2018, 1151）。

近年はストリートアートのクオリティが格段に高くなっていて、もう迷惑で汚い落書きどころか立派な現代アートとして認識されていて、重要な観光資源になることが見込まれている場合は、市や団体が積極的に支援するようになって

ている。ナポリ歴史地区が1995年にユネスコ世界遺産に登録され、さらなる観光名所として発展してゆくなか、猥雑な下町の中に意表をつくストリートアートが増加していった。これらはとてもフォトジェニックで、SNS時代にあってはインスタ映えする理想的な被写体であるため、2017年以降より急速に注目されるようになり、今ではすっかり観光資源として十分に機能しているようだ。しかしそこに至るまでの過程には段階的な下地もある。そこで本稿では、過去のナポリとその周辺（郊外とカンパーニア州内の一部）で派生したストリートアートの発展を、時系列・エリア別に整理することによって、現在までの様相や問題、今後の観光資源としての可能性をさぐるための、2019年までの状況の忘備録としたい。

## 2. ナポリの町の現代アート：ストリートアート増加前の状況

おそらくナポリで人々に強い衝撃を与えた最初のストリートアートは、1995年に登場した、市内で最も大きい広場であるプレビシート広場の中央を占領した「塩の山Montagna di Sale」というインスタレーションではないだろうか。これはカンパーニア州出身の著名な現代アーティスト、ミンモ・パラディーノ Mimmo Paladinoによる、すり鉢状の緩やかな山に、縦横無尽に様々な角度と恰好で沢山の馬の彫像がはめ込まれているとてもユニークな造形作品だ<sup>(4)</sup>。舞台となったプレビシート広場は、かつて巨大駐車場とバスターミナルとして使用されていた時期もあったが、1994年にナポリで行われた先進国首脳会議G7の開催に伴い、当時の市長アントニオ・バッソリーノ Antonio Bassolinoの英断によって車の立ち入りが禁じられて美観が取り戻され、市民の憩いの場となった。ここは広々とした王宮前にある治安の良い立地にあるがそれとは対照的に、ナポリには治安が心配な暗くて細長く狭い路地も多い。しかしこういった路地は、何世紀にもわたる歴史が刻まれたナポリらしさ溢れる魅力的な場所でもある。そのようなエリアを中心に、ナポリ市は、建築家で銅細工のアーティストで知られるリッカルド・ダリージ Riccardo Dalisi 教授に依頼して可愛らしい銅製街灯をいくつも取り付けさせた。まず1999年にカタラーナ小路 Rua Catalana に<sup>(5)</sup>、2000年には路地がひしめくスペイン地区 Quartieri Spagnoli が88個の街灯で飾られた<sup>(6)</sup>。これらは美的な都市インフラとして設置させたものだが、ダリージ教授の作品はニューヨークのMoMAやパリのポンピドゥーセンターなど世界各地の有名美術館に収蔵されるほど価値が高いため盗難被害も多かったようで、設置当時の面影はすぐに失われ、今ではほとんど残っておらず数体が確認されるだけだ（図1）。

現代アートをナポリの伝統とコラボさせようという動きは、世界最古の現役オペラハウスであるサン・カルロ劇場でもちょうどこの時期に起こっている。2002～3年に上演された演目の舞台美術では、従来のようなオペラ専門の舞台美術家たちに依頼するのではなく、現代アーティストに託す試みがなされた。2002年上演のプッチーニのオペラ



図1：カタラーナ小路にあるリッカルド・ダリージ作の銅製街灯の名残り（2019年3月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図2：現代アート美術館MADREの屋上に置かれたミンモ・パラディーノの馬の作品（2019年3月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

《トゥーランドット》の美術を画家でありながらオペラ演出も手掛けているデイヴィッド・ホックニー David Hockneyに、ロッシーニの《タンクレーディ》を先に挙げた彫刻家ミンモ・パラディーノに任せ、2003年上演のワーグナーの《さまよえるオランダ人》には画家ヴァレリオ・アダーミ Valerio Adamiを起用した (Compagnone, 2003)。これはアダーミの巨大な絵画作品が舞台奥の背景全面を大胆に占める舞台美術となり、音楽よりも現代アートのほうが主役になったかのような出来映えであった。

それから2005年、ナポリでは重要な現代アート美術館が2件も開館している。一つは高級地にある元貴族の館Palazzo Carafa di Roccella内にできたナポリ芸術館「パン (PAN: Palazzo delle Arti di Napoli)」で、もう一つは庶民的な旧市街の既存の歴史的建造物を改築したドンナレジーナ現代美術館「マドレ (MADRE: Museo d'arte contemporanea Donnaregina)」だ (図2)<sup>(7)</sup>。さらに2008年9月には、旧市街から一歩奥に入ったところにあるポンテコルヴォ路地 Vico Lungo Pontecorvoに、オーストリアの現代アーティスト、ヘルマン・ニツチュの美術館 (Museo Hermann Nitsch) も開館していて、ナポリの町が現代アートで飾られてきた時期と重なっているのは偶然ではないだろう。

次にナポリで起こった取り組みが、地下鉄1号線 (Linea 1) の駅構内に現代アートを設置することだった。1号線は現在中央駅に隣接したガリバルディ駅と北側の郊外スカンピーアを結んでいるが、当初は丘陵地ヴォメロ地区を横切る路線から開通されてきたため、ナポリっ子たちからは通称「丘の地下鉄 (Metropolitana Collinare)」とよばれていて、現在この1号線のうち11件の駅が「アート地下鉄駅 (Metro Art-Stazione dell'Arte)」として整備されているのだ<sup>(8)</sup>。

1号線のなかで最も古い駅であるヴァンヴィテッリ駅は、ヴォメロの中心の広場Piazza Vanvitelliに位置し、高台にある住宅街 (Colli Aminei) を結ぶために1993年に開業したが、この駅に現代アートが飾られてゆくのは路線拡張とともにアートな駅が増えてきた2005年以降である<sup>(9)</sup>。著名な現代アーティストと地下鉄1号線とのコラボが始まるのは、2001年に開業したムゼオ Museo 駅 (国立考古学博物館の真横の立地にある) で、この駅はイタリアを代表する建築家ガエ・アウレンティ Gae Aulentiによってデザインされ、ナポリをテーマにしてきた大御所的存在である写真家ミンモ・ヨーディチェ Mimmo Jodiceの作品が随所に飾られた。同じくアウレンティの設計で2002年に開業したDante 駅 (本路線の下町エリア、ダンテ広場の真上にある) 構内の壁面には、詩人ダンテの『饗宴 (Il Convivio)』(1307年)からの引用文を描いた電光アート (Joseph Kosuth作) や鉄に靴や古着をはさんだ作品 (Jannis Kounellis作) が設置された。2003年開業のマテルデイ Materdei 駅はポップアート系の作品 (ホーム壁面は Anna Gili, George Sowden, Dino Scardoniの作) が中心だ。ほかにもソル・ルウィット Sol LeWittのような世界的に有名なアーティストの作品もあり、エスカレーター部分にある陶器タイルのモザイク壁画 (Luigi Ontani作) には、海中に漂うナポリの化身プルチネッラの姿が描かれている<sup>(10)</sup>。なおこのマテルデイ駅は、次章でふれるストリートアート壁画群が増加中の

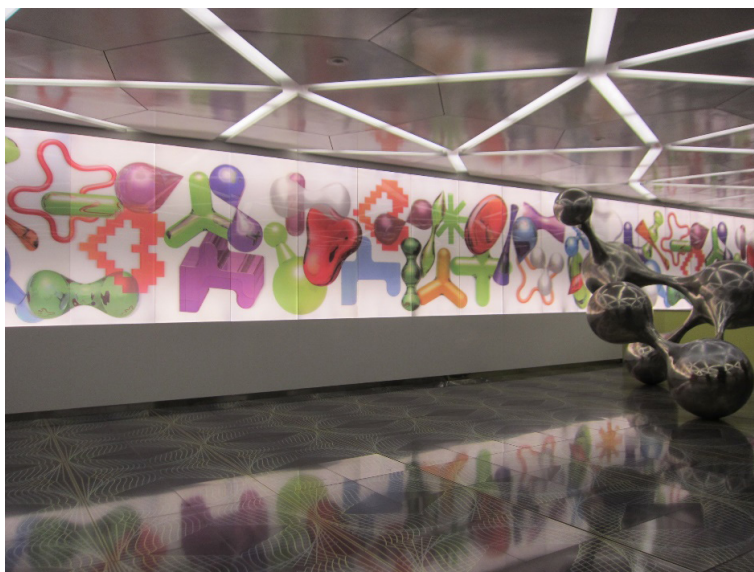


図3：カリム・ラシッドのデザインによるナポリ地下鉄1号線のユニヴェルシタ駅構内（2012年9月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

住宅街マテルデイ地区へ行く最寄り駅でもある。

ここまで述べた駅では、まだ世界的なSNS発信による知名度向上という点でまださほど目立っていなかった。しかし2010年代以降に開業した駅からは様子が変わってくる。2011年に開業したユニヴェルシタ Università 駅（ナポリ・フェデリコ2世大学法学科キャンパスの最寄）から、そのフォトジェニックさからSNS上の発信が増えてきた。この駅は、他の駅のように複数の作家の現代アート作品を展示するのではなく、一人のアーティスト、エジプト出身のインダストリアルデザイナーであるカリム・ラシッドが一手に内装を担当した最もポップで斬新なデザインの駅で、未来にタイムスリップしたような空間が体现でき駅そのものが芸術作品かのようだ（図3）。

そして「ナポリのアート地下鉄」の名声が一気にSNSで拡散されたのが、2012年9月17日に開業したトレド Toledo 駅（ナポリのメインストリートであるローマ通りにある－旧名称がトレド通り）である。トレド駅は改札通過後ホームへ至るエスカレーター部分に、幻想的な星空か深海にいるような青くきらきらと輝いた天井があることで、世界で最も美しい地下鉄と評判になりインターネット上で頻繁に紹介されるようになったが、この駅には他にもコンコースなどに現代アーティストの様々な作品が飾られている（図4）<sup>(11)</sup>。

ナポリの「アート地下鉄」が増加してゆくとともに、町中でも現代アートが積極的に展示されるようになってきた。



図4：海の現代アート写真（Robert Wilson作）で飾られたナポリ地下鉄1号線のトレド駅のコンコース（2012年9月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図5：マルティリ広場のマルティリ記念碑の台座にあるものと同じようなライオン像が路上に飛び出して  
いくナディア・マニャッカによるインスタレーション（2010年12月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

アート作品の展示期間は限定的で、その多くはクリスマス前から新年に向け町を盛り立てるのが目的だ。たとえば2010年12月7日から2011年1月1日まで、ブランド街に近い広場Piazza dei Martiriには7頭のライオン像が置かれていたが、これはナディア・マニャッカ Nadia Magnaccaによるインスタレーション作品だった（Caragliano, 2010）。設置場所のマルティリ（殉死者）広場の中心には、1799年のナポリ革命のときに殉死した人のための「マルティリ記念碑」があり、その台座に4頭のライオンが添えられているが、そのライオンたちが、台座から抜け出して高級ブランド店が軒を連ねるカラブリット通りへ向かって、7頭が列になって歩いているように見えるユニークなものだった（図5）。

なおこのマルティリ記念碑は1980年に二人の偉大な芸術家が記念撮影をした場所でもある。アンディ・ウォーホル Andy Warholが、マルティリ記念碑のライオンの口に手を突っ込んで噛みつかれたようにポーズをとり、ドイツの芸術家ヨーゼフ・ボイス Joseph Beuysとともに撮影したツーショット写真（ミンモ・ヨーディチェ撮影）が残っているのだ<sup>(12)</sup>。

2012年11月からは、旧市街のメインストリートであるトリブナーリ通りに交差する vico Fico ad Purgatorio ad Arco に、レッロ・エスポジト Lello Esposito 作のプルチネッラ像が恒久的に設置されている。レッロ・エスポジトはナポリの化身である伝統的な道化プルチネッラなどをモチーフにした作品を得意とするナポリ生まれのアーティストで、このプルチネッラ像は、今ではすっかり観光スポットの一つとなっていて、ここを通った観光客たちの多くはこの像を撮影している（Urbani, 2012）（図6）。

なお2005年にはヴェスヴィオ山の山頂へ行く途中に、ヴェスヴィオの溶岩を使って作った現代彫刻群が10体並べられた。選ばれた作家は外国人が中心で、イタリア人アーティストはレッロ・エスポジトのみで、彼はここで巨大なプルチネッラの仮面像を披露している（Napolitano, 2005）（図7）<sup>(13)</sup>。当時は写真撮影をする人をほとんど見かけなかったこのヴェスヴィオ山の山肌にある彫刻群であるが、最近ではわざわざ撮影しに来る外国人観光客が散見されるようになったのもSNSの影響ではないだろうか。

なおレッロ・エスポジトによるナポリを象徴する聖人サン・ジェンナーロをモチーフとするアート作品は、ナポリ市内のホテル「Renaissance Naples Hotel Mediterraneo」でも見る事ができる。というのもこのホテルのロビーで2013年5月にレッロ・エスポジト展が行われていて、サン・ジェンナーロをモチーフにした作品が12点展示されていた（De Luca, 2013）。当時はホテルの玄関前に、4メートル半もの高さのあるブロンズ製の巨大なサン・ジェンナーロの頭部像《サン・ジェンナーロの目》（2005年、レッロ・エスポジト作）も置かれ<sup>(14)</sup>、展覧会終了後は2作品をホテルオーナーが購入したため、今でもそれらをロビーで鑑賞することができるのだ。

さらに2019年のクリスマス前から2020年にかけて、ナポリ市はクリスマス用イルミネーションをこの有名アーティ



図6：レッコ・エスポジト制作のプルチネッラの頭部像（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図7：ヴェスヴィオ山にあるレッコ・エスポジトによる、溶岩でできたプルチネッラの巨大な仮面像（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

ストに依頼した。ナポリのキアア地区の主要な商店街を、レッコ・エスポジトがデザインしたイルミネーションで飾ったのだ。サン・ジェンナーロ、セイレーン、プルチネッラのマスクといったナポリらしさを象徴するものがモチーフになっていて、バレンタインデー期間のイルミネーションも兼ねられるように、これは2月28日まで続行された (Cennamo, 2019)。さらに同じ頃、2019年11月14日から2020年3月31日まで、ナポリの中心である市役所広場 Pizza del Municipioでは、中国人アーティストのリユ・ルオワン Liu Ruowang による100体の鉄製の狼像が設置された (Mendolla, 2019)。各280kgもある重さなので、なにかと盗難が心配されるナポリでは、盗難防止に役立つ算段もあったかもしれない (図8)。

以上本節では、ナポリ市内を現代アートで飾る試みの歴史を簡単に振り返ったが、住宅の壁に描かれたナポリのストリートアートについては、第4節でまとめて述べてゆく。一般住宅の壁面に描かれるのは、無名人によって許可なくゲリラ的に描かれるものがほとんどで、もともとナポリには多かったが、最近では有名なアーティストが市や団体に依頼されて描くクオリティの高いものが急増している。そのきっかけとなったのは、世界的に著名なバンクシー Banksy が(彼の場合はいつも無許可であることが売りだが)<sup>(15)</sup>、ナポリ旧市街のジロラミーニ広場の壁に《ピストルのある聖母 (Modonna con pistola)》を描き、それが2015年にガラス板で保護された時期と重なっているようだ (図9)。この



図8：2019年11月から2020年3月までナポリの市役所広場に展示された、リュ・ルオワンによる百頭の狼のインスタレーション（2019年11月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図9：ナポリのジロラミーニ広場にあるガラス板で保護されたバンクシーの壁画《ピストルのある聖母》（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

ナポリで唯一現存するバンクシー作品は、聖母マリアの頭上にピストルが描き込まれた構図で、カトリック聖母信仰の強いナポリが、反社会的勢力カモッラの支配から逃れられていない治安の悪さを表現したものらしい。

じつはバンクシーは、《ピストルのある聖母》よりも前に、イタリア初かつナポリ初でもある作品をスパッカナポリにある通りのひとつ via Benedetto Croce にもステンシル壁画を描いていた。17世紀のベルニーニの彫刻作品《聖テレーザの法悦》をモチーフに、その傍らにファーストフード的なハンバーガーとポテトが描かれたものであったが、当時は無名人の落書きと思われて2010年に上書きされて消えてしまったのだ (Ingegno, 2010)。つまり今保全されているほうのナポリのバンクシーは二つ目の作品なのである<sup>(16)</sup>。なぜバンクシーがナポリをイタリア初上陸地を選び、ナポリで少なくとも2作品も残しているのかという裏付けとして、バンクシーはミュージックバンド「Massive Attack」のリーダーのデル・ナジャ Robert Del Naja であり、彼の両親ナポリ出身の移民であることから、イタリア最初の作品をナポリに残したのではないかというスコットランド人記者の説がある (Elefante, 2016)。

### 3. ナポリとその近郊にある低所得層集合住宅での巨大壁画群

じつはカンパーニア州内の観光振興のため、初期の住宅壁画としてのストリートアートの誘致に積極的に取り組んでいたのは、ナポリよりもフローレ Fuore というアマルフィ海岸の村のほうが早かった。ただしこの取り組みはほとんど話題にならずに今に至っている。その理由は、壁画のクオリティが低いものが多いこと、その壁画の並べ方が建物にも景観にも全く調和していなかったこと、そしてSNSでの波及に頼った観光が興隆する時代には早すぎたことだった。しかし良質なものであれば、当時さほど話題になっていなくても、最近になって写真撮影をする観光客が増加して情報が拡散されることもあるのだが、このフローレの「壁画村」については、2020年1月現在インスタグラムで「#Furore」と検索しても、ここの壁画群はなにもヒットせず、フローレの美しい伝統的な谷間の景観の写真が上がってくるばかりである。

1997年にユネスコ世界遺産に登録されたアマルフィ海岸の町の一つであるフローレは、イタリアで最も美しい村協会 (I borghi più belli d'Italia) にも加盟していて、おそらくその頃から毎年世界中からアーティストを呼び、急斜面の蛇行した幹線道路沿い (Strada Statale 366, via Belvedere, via Santa Maria, via Pietro Summonte, via San Michele) の塀に色とりどりの壁画を描かせていて「壁画村 Paese Dipinto」と名乗っていた。ただし、その道は観光客が「徒歩で」散策するルートからは外れていて、足で散歩するには高低差や勾配もあって便が悪い。車で一瞬のうちに通り過ぎてゆくときに、これらの壁画群は目に入ってくるものの、学校の文化祭的レベルのものが先に目立ってしまい、車を止めて一つずつ撮影したくなるような芸術性高いものが一体どこにあるのか分かりにくい。制作者も複数にわたっていることもあって、統一感なく景観破壊にも繋がりがねない稚拙な作品ばかりなような印象を受けざるを得ないのだ。現在グーグルマップでその壁画のある通りを確認したところ、当時描かれた壁画は風化するにまかせたままになったものもあれば、近年描かれたと思われる洗練されたものもある。よって、よく見れば美しい作品も幾つかあるのだろうが (図10)、やはり車で一瞬で通りすぎてしまうような道にあるためよく見ることができず、なによりも周辺環境の風景と調和するように展示されていないのが致命的だろう (図11)。

治安も良く牧歌的な地中海の風光明媚な景観のなか、カラフルな色調の壁画は白亜の地中海建築の良さを損いかねないし、最初から観光振興しようという下心から生まれたストリート壁画はあまり人々の心を打つことはないのだろう<sup>(17)</sup>。やはりゲリラ的に切実な社会的メッセージを含めたストリートアートのほうが、我々に直接訴えかける力を持っているのではないのだろうか。ナポリとその近郊で今活躍しているのは、治安の悪い貧困地区で社会的弱者からの強いメッセージを壁画によって代弁することによって、一躍有名になったストリートアーティストだ。なかでも最も注目されているのが、ナポリ公認のストリートアートを次々と生み出し、毎度話題をさらってゆくスプレー壁画家のヨリットだ。



図10：Mario Ortalani氏によって1998年にフローレのサン・ミケーレ通りの民家に描かれた壁画 ©2019Google





図11：2019年5月に撮影されたグーグル・ストリートビューにみられるフローレのステンモンテ通りの壁画（2007年9月にV. Perna氏によって描かれた伝説の人魚セイレーンをテーマにしたもの）©2019Google

### 3-1. ヨリットによる作品

ヨリット (Jorit Agoch, 1990年ナポリ生まれ、郊外クワルト Quarto で育つ) はナポリのストリートアート界の象徴的な存在<sup>(18)</sup>であり、彼の登場によってナポリのストリートアート文化が牽引されていったといっても過言ではない。彼がかくも影響力の強いアーティストとなったのは、その作風が、ナポリ美術史とも関係ある16世紀の画家カラヴァッジョの明暗法を受け継ぎ、暗闇を背景に巨大な顔が浮かび上がるカラヴァジェスキ風の色調で描かれるスプレー画であるというのがその一因かもしれない。彼の最近の作品は、黒い背景の面積が少なくなり肖像の顔のアップが強調される傾向になってきたため、カラヴァジェスキ的な感じはやや薄れてきたものの、彼の名声を広めた最初の作品には、カラヴァッジョの影響がかなり色濃く表れている<sup>(19)</sup>。それは2015年5月、ロマの少女を描いた《Ael. Tutt'egual song'e criature》と題する巨大肖像画で(図12)、黒い背景面積が大きく彼女の服装も16世紀風にみえる。Aelはロマ語で「空を見上げる女性」を意味し、副題はナポリ弁で「この子供もみんな同じ」という意味で、この壁画は、イタリア全土を挙げての人種差別撲滅キャンペーン「Accendi la mente, spegni i pregiudizi (頭を切り変えて偏見をな



図12：ボンティチェッリのバルコ・メロラの住宅にヨリットによって描かれたロマの少女の巨大な肖像壁画、当初右下に描かれていた2冊の本が黒く塗りつぶされ消去されていた(2019年8月、筆者撮影)©Ewa Kawamura



図13：フォルチェッラ地区の住宅の壁にヨリットによって描かれた《ジェンナーロ》（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

くそう)」の一環として実現したものだ (Chetta, 2015)<sup>(20)</sup>。この作品は、2015年、低所得者層の集合住宅が集まる郊外のポンティチェッリ Ponticelliにある、パルコ・メロラ (Parco Merola) 内で描かれた。ここは次節で詳しく述べるが、のちに別名「壁画住宅区 (Parco dei Murales)」として知られる場所で、最初の記念すべき壁画がヨリットに委ねられたというわけである。

ヨリットが描くすべての肖像画に共通するのは、赤い「切り傷 (cicatrici)」が顔に斜めに数本入っていることだ。切り傷といっても、どこかの部族の入れ墨っぽい赤い線なので、この印はどの人種や階層でも平等であることを表しつつ、ときには心の傷も象徴するものとして解釈されている。

同年に完成したヨリットの巨大肖像画は、2015年9月19日のサン・ジェンナーロの聖人の日に完成するように、一週間かけて制作された。今度は郊外でなくナポリの旧市街の中心部で描かれた。犯罪組織カモッラのボスが住んでいるというフォルチェッラ Forcella 地区に属している集合住宅の外壁で、《ジェンナーロ Gennaro》と題する巨大肖像画だ。ナポリの守護聖人サン・ジェンナーロを思わせる司教帽をかぶった若者の肖像だが、ナポリではよくある男子名である Gennaro という名の35歳の友人の作業員 (operario) の青年を描いたものというが (図13) (De Rosa, 2015)、治安の悪さで有名なフォルチェッラに住む反社会組織カモッラのボス、ヌンツィオ・ジュリアーノ Nunzio Giuliano をモデルにしてるのではないかという説もある (Zerlenga, 2017, 6)。治安の悪さで有名なフォルチェッラといっても、ナポリで最も重要な教会、大聖堂 Duomo (内部にはサン・ジェンナーロを祀る礼拝堂がある) のある大聖堂通り Via Duomo に面した建物に描かれているので、観光客の往来も頻繁で、比較的安全な立地にある。

次にヨリットが制作を任されたのは、サン・ジョヴァンニ・ア・テドゥッチョ San Giovanni a Teduccio の低所得者層の集合住宅の壁画である。このエリアは、その治安の悪さからニューヨークの「ブロンクス」をもじって「ナポリのブロンクス」と呼ばれているほどだ。まず完成したのは2017年3月、6月2日大通り (Viale Due Giugno) の1棟の壁に描かれた、かつてナポリで活躍した伝説的なサッカー選手マラドーナ Diego Maradona<sup>(21)</sup> の若いときの肖像画だ。2018年3月には対となっている隣りのもう1棟の外壁に、一般人の自閉症の少年ニコロ Niccolò も描かれた。マラドーナの肖像の下には大きく赤字で「DIOS UMANO」(umano はイタリア語で「人間の」で、dios はマラドーナの母国語スペイン語で「神」)、とマラドーナのカリスマ的天性を言及しているのか「人間の神」と書かれている。一方でニコロのほうは、目を閉じた肖像と目を開いた肖像が上下に重ねられていて、一番下には「ESSERE UMANI」(イタリア語で「人間」という意) と書かれ、一般人代表としてのニコロ、あるいはナポリの典型的なやんちゃな少年 scunizzo を象徴する存在として描かれているのだろう (Bottone, 2018a) (図14)。

さらに2018年9月には、これらの壁画を制作したのと同じ2棟の建物の西側壁面 (パロッキア通り Via Parocchia) に (図15)、アルゼンチンの革命家チェ・ゲバラ Che Guevara の巨大な顔が半分ずつヨリットによって描かれた



図14：サン・ジョヴァンニ・ア・テドゥッチョの6月2日大通りの住宅にヨリットによって描かれたマラドーナと少年ニコロの巨大な肖像壁画（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図15：チェ・ゲバラの壁画がヨリットによって描かれる前の、サン・ジョヴァンニ・ア・テドゥッチョのパロッキア通りの建物の外壁（2018年5月のグーグル・ストリートビューに記録されたもの）©2019Google

(Monaco, 2018)。その肖像の右下には有名な言葉「Patria o muerte (祖国か死か)」も描き込まれている。チェ・ゲバラが題材に選ばれたのは、このナポリから無視されてきた貧しい場所を再生してゆく(=解放する)とう願いを重ね合わせたもので、2019年3月にはチェ・ゲバラの娘もここを訪問している。

チェ・ゲバラの次にヨリットが取り組んだ肖像壁画は、2009年10月22日にローマの拘置所で亡くなった囚人ステファノ・クッキStefano Cucchiの姉イラリアIlariaの肖像である。ステファノはドラッグ保持の罪で収容され、僅か7日目に警察の過剰な暴力によって「殺された」可能性が指摘されている。つまり、警察が囚人へふるう不当な暴力を撲滅するように戦っている彼女の運動を後押しするために制作された。このイラリア・クッキの肖像は、2018年10月、中流階級の住むヴォメロ地区にあるメツインガー通り via Menzinger に描かれたが(図16)、ヨリットはナポリの日刊紙「Il Mattino」の記者に、とある筋からこの壁画の制作やめるように脅されていたことを明かしている(Cundari; Crimaldi, 2018)。

なおヴォメロ地区には、もう一人の不条理に殺された人物をモチーフにしたストリートアートが2016年に作成されている。それはヴォメロのアレネッタ地区 Arenellaにあるロマニエロ通り via Vincenzo Romaniello 近くの集合住宅



図16：ヴォメロ地区のメッツィンガー通りにある、イラリア・クッキの顔がヨリットによって二重に描かれた肖像壁画（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

の塀を廻って描かれた壁画《ジャンカルロ》(Orticanoodles作)だ。この作品は、この場所の目の前にある自宅の玄関前で夜の帰宅中に、反社会的勢力カモッラの銃弾によって1985年に落命したナポリ生まれのジャーナリスト、ジャンカルロ・シアーニ Giancarlo Sianiをテーマにしたものだ。作品の完成式典も彼の命日に合わせた9月23日が選ばれ、制作資金はクラウドファンディングによっている (Palermo, 2017, 2799)。

さらにヨリットの作品は、2019年1月にも制作された。1975年に殺害された映画監督パゾリーニ Pier Paolo Pasoliniの巨大肖像画で、これは地下鉄1号線のスカンピーア駅前にある集合住宅の壁に描かれた。駅を出てすぐ正面に伸びる通りを挟んで両脇にある左右対称の建物で、右手にパゾリーニ、左手に黒人人権保護の活動家のアンジェラ・デイヴィス Angela Davisの顔も同じくヨリットによって制作された (図17)<sup>(22)</sup>。

スカンピーアは、ナポリ北部にある郊外の低所得層の住むエリアで、スカンピーア Scampiaの語源は「開拓されなかった畑」という意味だ。地下鉄路線の拡大によって、1995年にPiscinola-Scampia駅ができたことによってアクセスが格段に良くなった。かつて麻薬の密売などで悪名高く、スラムのような低所得層のための集合住宅があり、なかなか立ち寄り難い場所だった。犯罪の温床となったこの住宅地はその帆のような形状から、通称「Vele (ヨット)」とも、関連法規番号167に因んで「Centosessantasette (チェントセッサンタセッテ)」とも地元民から呼ばれている (図18)。ここが小説『ゴモッラ Gomorra』(2006年)を原作とする同名映画(2008年)のロケ地になってからは、世界中の人々にも知られるようになり、今では旅行口コミサイトTripAdvisorにまで「Vele di Scampia」という項目がつけられ、ここを訪れた観光客たちによって好評のコメントが残されるまでになっている。

巨大建造物でもあるこの集合住宅「Vele」は、建築家ディ・サルヴォ Francesco di Salvoの設計で1962-1975年に7棟が建設されたが、1997-2003年に3棟が解体されたので現存しているのは4棟である (Lauda; Zerlenga, 2018, 1175-1176)。住民たちによって白かった外壁が様々な色で塗られていたり、不規則な落書きも多かったりして (図19)、その薄汚れた異様な外観とデザイン性の高さなどが醸し出すギャップから、見る者の目を引き付け圧倒させられる建物だ。

さらに2019年は、さきのヨリットの壁画完成に合わせて、スカンピーアにある市営ランディエーリ運動場Stadio comunale Antonio Landieriの塀の壁にも、一連のカラフルな壁画が制作されている。ガンディーやマンデラ、マーティン・ルーサー・キング Jr.など、11名の世界的に著名な平和主義者たちの肖像をモチーフにした横長の作品で、肖像の人物が変わるごとに色が塗分けられている (Esposito La Rossa, 2019)。スカンピーアでは、このような社会的メッセージを込めたストリートアートを増やすことによって、地域の再生と治安の向上に市が力を入れている。

さらに2019年5月は、ナポリが第30回夏季ユニバーシアードの開催地に選ばれていたことに合わせ、ヨリットは、ナポリ東側の新官庁区Centro Direzionale (1980年に丹下健三が都市設計したエリア)の高層ビルの横壁を使った



図17：  
地下鉄スカンピーア駅前にあるヨリットによるパゾリーニ（右）とアンジェラ・デイヴィス（左）の肖像壁画（2019年11月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図18：  
スカンピーア駅にある集合住宅「Vele」（2019年11月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図19：  
スカンピーア駅にある集合住宅「Vele」の外壁にみられる落書き（2019年11月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

一連の壁画も制作している。この国際大学スポーツ連盟（略称FISU）が主催する総合競技大会に因んで、5名のカンパーニア州出身のスポーツ選手たちの顔がヨリットによって描かれたのだ（De Luca, 2019a）<sup>(23)</sup>。ヨリットは今では世界各地へ活動の場を広げている。2019年はマイアミのアート・バーゼルにも参加していて、もはや「ナポリ版バンクシー」ともよばれるほどの勢いとなっている。

### 3-2. パルコ・メロラ「壁画住宅区」

2015年のヨリットの壁画によって始まったポンティチェッリのパルコ・メロラ（Parco Merola）内の「壁画住宅区」では、次々と複数のアーティストたちによって巨大な壁画群が制作され、2020年1月までに少なくとも8点の壁画が描かれた<sup>(24)</sup>。ここはほとんど観光客が近づくことのない郊外エリアで、このパルコ・メロラという住宅区の名前は、隣接するアルド・メロラ大通り Viale Aldo Merola（「大通り」といっても殺風景な車道で、徒歩で往来したくなるような環境にはない）に由来している。つまりナポリ王立植物園園長のアルド・メロラ Aldo Merola の名を冠した場所なので、その名に恥じることのないような心地よい場所づくりをしようという願いが込められて、この「壁画住宅区」のプロジェクトが組まれているという（Bottone, 2018b）。

この壁画の題名はすべてナポリ弁となっていて、ヨリット作のロマの少女の肖像《アエル》に続いて2015年7月に完成した壁画は《A pazziella 'n man'e criature》（Zed1作）<sup>(25)</sup> という名の作品だ（図20）（Zagaria, 2015a）。ナポリの伝統的な道化プルチネッラが操り人形のように化して、ゲームコントローラーに抱き着いている様子を描いたものだ。現代においては、機知に富んでいたはずのナポリの子供すらビデオゲームの呪縛に操られてしまっているのではないかと、警鐘を鳴らすアイロニカルな壁画で、この壁画の制作にはナポリのロータリークラブが援助をした（De Rosa, 2015）。

同じく2015年7月には、この「壁画住宅区」の3作目として、二人のサッカー少年の姿を描いた《Chi è vuluto bene, nun s'ò scorda（愛されている人は忘れない）》というタイトルの壁画が登場した（図21）。シチリア人ユニットアーティスト Rosk&Loste による作品で<sup>(26)</sup>、マラドーナの出身アルゼンチンのユニホームを着ている少年とナポリのチームのユニホームを着ている少年がサッカーに興じているとても写実的な作品である（Zagaria, 2015b）。

2016年には、ここの住民たちの群像をモチーフにした作品《Lo trattenemiento de' peccerille（おチビちゃんたちの扱い方）》（Mattia Campo Dall'Orto作）が完成した。この壁画は、2015年に描かれたプルチネッラの壁画の左隣の棟に描かれた。子供たちを中心とした8名の穏やかな表情をした住民たちの肖像で、右上にはここで可愛がられていた犬の肖像も加わっているという。下方に全面に描かれている二人の子供は一冊の本を一緒に読んでいて、さらに



図20：パルコ・メロラにある隣合わせに制作された二つの壁画（右：Zed1による壁画、左：マッティア・カンポ・ダッオルトによる住民の群像をモチーフにした壁画）（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図21：パルコ・メロラにある壁画《愛されている人は忘れない》(Rosk&Loste作) (2019年8月、筆者撮影) ©Ewa Kawamura



図22：パルコ・メロラにある壁画《一人のマンマはみんなのマンマ》(右)と《君のそばにいるよ》(左) (2019年8月、筆者撮影) ©Ewa Kawamura

壁面右上には、ウンベルト・エーコ Umberto Eco の言葉「読書は過去を不滅にする (La lettura è un'immortalità all'indietro)」という教訓的な言葉も書かれている。それは、歴史から学べる教訓や教養を読書によって身に付けてほしいという企画者たち (Inwardら) の思いが込められているに違いない。これは前節で述べた、2015年に描かれたヨリットのロマの少女の肖像壁画にも4冊の本 (19～20世紀初頭の本のような格式ある装丁のもの) が描き込まれていてこととも繋がっているのだろう。この壁画はまたたくまにSNSを通じて拡散されていったという (Bottone, 2016)。

2017年夏には、壁画《'A Mamm' 'e Tutt' 'e Mamm' (一人のマンマはみんなのマンマ)》(La Fille Bertha作) も完成した<sup>(27)</sup>。15世紀の画家ピエロ・デッラ・フランチェスカ Piero della Francesca の《慈悲の聖母 Madonna della Misericordia》を思わせる構図で母が両手で二人の娘を支えている絵だ<sup>(28)</sup>。その隣りの棟の壁に描かれたのは《Je sto vicino a te (君のそばにいるよ)》(Daniele Nitti作)<sup>(29)</sup>と題した作品で、架空の郊外住宅をモチーフにしたものだ (図22)<sup>(30)</sup>。

2018年4月に完成した7作目の壁画の題名は《'O sciore cchiù felice (さらに幸せな花)》(Fabio Petani作) で (図23)、この子供たちがナポリ植物園の「メロラ温室」を訪れたことから着想された作品である。中心に描かれているのは地中海原産の花「gigaro chiaro (学名: Arum italicum)」で、3月になるとサン・ジェンナーロ溪谷 Vallone di



図23：パルコ・メロラにある7作目の壁画《さらに幸せな花》（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura



図24：パルコ・メロラにある8作目の壁画《Cura 'e paure》（2019年8月、筆者撮影）©Ewa Kawamura

San Gennaroに咲くという (Bottone, 2018b)。

2018年7月に完成した壁画は《Cura 'e paure》(Zeus40作)<sup>(31)</sup>と題した、顔のない家族の肖像画で(図24)、このパルコ・メロラに住んでいる実在の4名(Ilenia, Francesco, Giovanni, Stefania)がモデルになっている。彼らはこの壁画プロジェクトに尽力してきたメンバーでもあり、題名はナポリで活躍していた歌手「24 Grana」の歌「Kevlar」の歌詞からとったものだ(Bottone, 2018c)。

さらに2019年6月には、私鉄のヴェスヴィオ周遊鉄道Circumvesuvianaのポンティチェッリ駅にも、パルコ・メロラの壁画地区化を推進している団体Inwardの取り組みによって、複数のナポリ出身のアーティストによる壁画が描かれて(Mormone, 2019)、この地区の治安の向上と地域の活性化・再生に地元が精力的に力を入れていることがうかがえる。

### 3-3. ナポリ市内

大規模で近代的な集合住宅のある郊外は、壁画を描くための広いキャンバスとなる外壁が豊富にあるが、歴史的建造物が狭い路地にひしめいているナポリ旧市街の下町も、低所得者層のエリアであればあるほどストリートアートの存在が映える傾向にある。そのため、本来は観光客があまり立ち入らなかった下町エリアを中心に、近年ストリート壁画が





図25：マテルデイ地区にあるボソレッティの壁画《パルテノペ》（2019年8月筆者撮影）©Ewa Kawamura

急増中だ。こういった場所は庶民地区 (Quartiere popolare) とも呼ばれているが、歴史的建造物から成るエリア独特の雰囲気には、戦後に整備されたエリアには代えられない魅力があるため、近年ではジェントリフィケーションが進み、居住者たちには若い世代や中間所得層・インテリ層も多くなってきたところもある。もともと貴族の屋敷が建ち並んでいたエリアも混在しているので、建物によっては貴族の末裔や高所得層も住んでいるもの、一步路地を入れれば、「バツソ basso」と呼ばれるタイプの貧困層向けの地上階のワンルーム住宅 (キッチン・リビング・寝室すべてが一体となった一部屋へ、道路に面したドアから出入りするタイプ) も少なくない。

そんなナポリの旧市街の庶民的な地区で、精力的な活動を行っているのが、アルゼンチン出身のボソレッティ Francisco Bosoletti だ<sup>(32)</sup>。ヨリットはナポリでその名声を築いたが、ボソレッティは世界を舞台にすでに有名なストリート壁画専門のアーティストで、彼の作品もナポリ旧市街の庶民的な住宅街を中心にいくつも描かれている。まず2015年、マテルデイ Materdei 地区のサン・ラッファエーレ通り Salita San Raffaele に、ナポリ湾ににいるという伝説の人魚の壁画《パルテノペ Parthenope》(図25) を作成したが (Coppola, 2015)、ボソレッティはナポリ出身者ではないために、ナポリの象徴ではずのパルテノペであるものの、ナポリ人であればこのようには描かないであろうという画風になっている。同通りにあるテレジア会の廃修道院にもボソレッティの同じ様式の作品群が見られるが、マテルデイ地区には法律で全廃されたかつての精神病院もあって、この外壁には世界的に有名なストリートアーティスト Blu の作品も2016年3月に登場している (De Simone, 2016b)。

ボソレッティの壁画は、もう一つの庶民的な地区であるサニタ Sanità 地区でも見ることができる。レジスタンス運動をモチーフにした《Resis-ti-amo》(2016年) という題の作品で、サンタ・マリア・デッラ・サニタ教会の横の壁面に描かれてたもので、ナポリ市長のデ・マジストリス Luigi de Magistris も好意的に高く評価しているほどだ (De Simone, 2016a)。なお同じ頃このサニタ地区の広場 Piazza Sanità に面した住宅には、スペイン人アーティスト Tono Cruz が描いた壁画《Luce》も完成している。サニタ地区は治安の悪いエリアであるが、近年は彼ら以外にも色々な作家たちによって、ハイレベルなストリートアートが急増して、観光客も増えつつある<sup>(33)</sup>。

さらにボソレッティは2017年9月、庶民的な住宅街であるスペイン地区にある通り via Emanuele De Deo に<sup>(34)</sup>、サン・セヴェーロ礼拝堂の18世紀のヴェールに包まれた女性像の寓意彫刻《謙虚 Pudicizia》をモチーフにした壁画《イシス Iside》を作成している (Perillo, 2017)。その隣の建物の外壁には、すでに1990年にマラドーナの全身像の壁画も描かれていたが、近年のストリートアートへの関心の高まりとボソレッティの壁画の制作に合わせて、こちらも修復された (De Luca, 2017)。ほかにもボソレッティが作成したストリートアートは、ナポリの旧市街にあるベッリーニ通り Via Bellini とトリブナーリ通り Via dei Tribunali でも見ることができる<sup>(35)</sup>。

じつはスペイン地区では、すでに2015年に「Roxy in the box」という名で活躍してるナポリ出身女性アーティスト

Rosaria Bossoが、ここで大変面白い一連のストリート壁画を披露していた。ナポリの下町では、低所得者向けの地上階ワンルーム「バツ」の玄関前の路上に椅子を出し、住人の中高年女性がそこに座っている光景がよく見られるが、その様子をモチーフにして、まるで世界の歴史上の有名な人（モナリザや女性画家ジェンティレスキなど）がバツの玄関前に椅子を出して座っているかのような壁画シリーズを制作しているのだ（De Luca, 2015）。Roxy in the boxはヨリットの《ジェンナーロ》（2015年）に誘発されたのか、その近くで彼女も、翌2016年のサン・ジェンナーロの祝日に合わせて、サン・ジェンナーロとカラヴァッジョをモチーフにしたストリート壁画《Mission Possible》を制作している（Mastropaolo, 2016）。彼女はSNS時代のストリートアートの流行よりも先駆けて、やや早く取り組みすぎた大御所といえるかもしれない。じっさいレッコ・エスポジトも起用されたことがある、地元のミネラルウォーターのブランド「フェラレレ」のアートコレクション限定ボトルの2019年版デザインが、彼女の描いたサン・ジェンナーロ像になっている。これは1本45ユーロもする価格で50本限定で販売されていて、毎年アート界の重鎮的存在のナポリにゆかりのあるアーティストがボトルのラベル画のデザイナーに選ばれているのだ<sup>(36)</sup>。彼女の作風はアンディ・ウォーホルの影響を受けたポップアートに属していて、ストリートアーティストたちに共通しがちなヒッピー的な要素とは隔絶しており、ラグジャリーな雰囲気すら感じとれる。そのため高級店を飾るのに十分ふさわしく、クリスマスから新年にかけて行われた2019-20年のカプリ島のアートイベント「Capri Loves Art」開催期間中には<sup>(37)</sup>、高級ブランドショップFENDIのショーウィンドウにおいて、アルコール飲料のマルチーニと殉教したナポリ聖人をもじった彼女の作品「San Gennaro - Un Martire da bere（サン・ジェンナーロ-飲む殉教者）」などが展示された（Raicaldo, 2019）。

さらに取り組みが早すぎて忘れ去られてしまっているが、ナポリの特筆すべきストリートアートを残した人物として、フランスの造形作家ピニオン=エルネストErnest Pignon-Ernestも挙げられる。彼はナポリ旧市街の庶民的な路地裏で、2014年3月にモノトーンの一連の壁画を制作しており（De Luca, 2014）、同年に出版された彼のモノグラフ書籍の表紙には、ナポリのサン・アゴスティーノ・アッラ・ゼッカ路地にそのとき描いたストリートアートの写真が選ばれている<sup>(38)</sup>。

さきに述べたナポリ郊外の住宅壁画のあるポンティチェッリ、サン・ジョヴァンニ・ア・テドゥッチョ、スカンピーアほど遠くないナポリの郊外では、近代的な戦後の建物が多い地区であるルツァッティ地区（Rione Luzzatti）も、近年ストリートアート壁画の増加が激しいエリアである。

ルツァッティ地区は、低所得者層を中心とするナポリ東側の住宅街で、エレナ・フェランテElena Ferranteによるベストセラー小説『頭が良すぎるお友達（L'amica geniale）』（2011年）<sup>(39)</sup>の舞台で、そのテレビドラマ化によって一躍有名となった。このルツァッティ地区は、現在「壁画地区（Rione dei Murales）」とも命名され<sup>(40)</sup>、ストリートアートが点在しているが、そのなかでも最も有名なのが、ゴメス（Luis Aberto Gomez de Teran, 1980年生まれ、ローマ在住）によって描かれた、ロビアンコ広場Piazza Lo Biancoに面した住宅壁画《Nient'altro importa（全くどうでもいい）》と題した巨大な作品である。これは19世紀のフランスの画家ブグロー（William Adolphe Bouguereau）の油彩《嵐L'orage》（1874年）を引用したもので、悪天候のなか二人の娘が不安げな眼差しを向けて抱き合っている構図だが（Carotenuto, 2019）、エレナ・フェランテの小説の主人公である聡明な少女リラと友達レスツチャを重ね合わせたもので、2019年6月に完成した（De Luca, 2019b）。それからわずか2か月後にあたる同年8月の時点で、すでにカンパーニア州の公認ガイドが、観光バスでアメリカ人の団体旅行者を引き連れてこの「壁画地区」を案内しているので、ナポリ市が積極的にここも観光スポットにしようとしているのがわかる（図26）。

公共の交通機関でこのルツァッティ地区の壁画を見に行く場合は、地下鉄のジャントゥルコGianturco駅が最寄駅で、ここから徒歩10分ほどのところにある。この駅前はずかつて日本人旅行者の犠牲者を出してしまったこともあり<sup>(41)</sup>、治安が良いとはとうてい言い難いエリアである。「壁画地区」へ行くには暗いトンネル（図27）を通り抜けて行く必要があり、そのなかには「クラシックな」従来型の落書きもあるが、驚いたことに、2019年、ドイツの代表的な観光雑誌「メリアンMerian」（2019年9月号の「ナポリ特集」）は、記事見開き2ページを使用して、まるで発見されたばかりの古代遺跡の写真と見紛うばかりに、このトンネルの写真も掲載しつつナポリのストリートアート各種を紹介している。



図26：ナポリのルツァッティ地区で、壁画《Nient'altro importa》の説明をしているカンパーニア州公認ガイドとアメリカ人団体観光客たち（2019年8月筆者撮影）©Ewa Kawamura



図27：地下鉄ジャントゥルコ駅からルツァッティ地区へ行くにはこのトンネルを抜ける必要がある（2019年8月筆者撮影）©Ewa Kawamura

#### 4. おわりに

以上紹介したナポリのストリートアートは、主要なものばかりである。マイナーなものも合わせれば無数になるだろう。やはり世界的にみて、ストリートアートの地位が向上したのは、バンクシーの影響も大きいだろう。バンクシーによれば「アートは特権階級のための乱交パーティーではない。大衆のための、人々の生活の一部であるべきなのだ」という（ポッター，2013，20）<sup>(42)</sup>。つまり、庶民的な住宅街に壁画が好んで描かれてゆくことは、ごく自然な成りゆきといえるのだ。

かつてグラフィティ（落書き）壁画は、たいがい治安が悪い場所にあつて、不潔で怖くて迷惑なものというイメージと重なっていたが、今では専門のアーティストが描くことによって質が格段に向上し、従来のネガティブなイメージが払拭され、面白いアートの一環として「オシャレなもの」として扱われるようになってきている。それはSNS時代、インスタグラム等でその写真が拡散されやすい時期を同じくして、「写真映えする」ものと認識され、世界的にストリートアートが近年活性化してきている。とくにナポリは、低所得者層の住宅地の殺伐とした雰囲気と、社会問題にも立

ち向かおうとするメッセージ性と色彩のコントラストや奇抜な構図によって、ストリートアートがとりわけ「映える」町であることによって、世界的にみてもストリートアートがとりわけ発展しやすい土壤にあると言えるのではないだろうか<sup>(43)</sup>。

## 注

- (1) Arnaldi, V. (2017). *Sulle tracce della street art. Viaggio alla scoperta dei più bei murales italiani*, Roma, Ultra.
- (2) イタリアで話題となったストリートアートを制作した作家別に編纂された書籍には、Petrella S. (2017). *Street art oggi a Roma. Nelle immagini di Mimmo Frassinetti*, Roma, De Luca Editori d'Arte; Bianchi, F.; Bani, E. (2019), *Pisa è Tuttomondo! Il murale di Keith Haring raccontato alle nuove generazioni*, Pisa, De Luca Editori d'Arteがあり、エリア別ではFilippi, M.; Mondino, M.; Tuttomondo, L. (2017). *Street art in Sicilia. Guida ai luoghi e alle opere*, Palermo, Flaccovio Dario; Cucchiarelli, C. (2018). *Quello che i muri dicono. Guida ragionata alla street art della capitale*, Roma, Iacobellieditore; Ciancabilla, L. (2015). *The sight gallery. La salvaguardia e la conservazione della pittura murale urbana a Bologna*, Bologna, Bononia University Pressなどがある。
- (3) 以下に、2019年9月に行われたイタリア都市史学会(於: ポローニャ大学建築学部)のプログラムに記載されているストリートアート関連の「発表者(所属)、発表題目」を記述するが、学会当日アレグラ・ルッソは欠席、ゼルレンガの発表はチリッコが代読した。Ornella Zerlenga (Università degli Studi della Campania "Luigi Vanvitelli"), *Street art a Scampia (NA): fronti urbani contro la periferia globale*; Vincenzo Cirillo (Università degli Studi della Campania "Luigi Vanvitelli"), *La street art come immagine, forma e narrazione degli spazi urbani periferici*; Valentina Allegra Russo (Università degli Studi di Napoli "Federico II"), *L'amica geniale in una città al margine. Il rione Luzzatti-Ascarelli nel racconto di Elena Ferrante*.
- (4) これを小規模化したものが、今はナポリの王宮内にある国立ヴィットリオ・エマヌエーレ3世図書館の入り口付近(サン・カルロ劇場の裏手)に飾られているが、残念ながらほとんど誰にも(観光客はおろか市民にも)あまり目につかないような立地に置かれている。
- (5) リッカルド・ダリージのオフィシャルサイトの業績紹介ページを参照: <https://www.riccardodalisi.it/portfolio-item/rua-catalana/> (2019年12月31日閲覧)
- (6) 続く2001年には旧市街のサン・ニコラ・ア・ニーロ小路vico San Nicola a Niloで、ダリージによる銅製プレゼピオ(キリスト生誕シーンの人形)が路地の間をまたぐかたちで空中に掛けられた。<https://www.riccardodalisi.it/portfolio-item/vico-san-nicola-a-nilo/> (2019年12月31日閲覧)
- (7) ドンナレジーナとは、すぐ近くにある聖マリア・ドンナレジーナ教会(Chiesa di Santa Maria Donnaregina vecchia)の名に因んだもので、この美術館は19世紀の建物のリノベーションしたものだが、2007年に拡張された展示室はポルトガルの建築家アルヴァロ・シザが手掛けている。
- (8) 1号線ほか、地下鉄6号線の4件の駅もアート地下鉄駅「Metro Art-Stazione dell'Arte」として紹介されている。[http://www.anm.it/index.php?option=com\\_content&task=view&id=687&Itemid=295](http://www.anm.it/index.php?option=com_content&task=view&id=687&Itemid=295) (2020年1月3日閲覧)
- (9) ヴァンヴィテッリ駅的设计はMichele Capobiancoによるもので、ホームのモザイク画(Isabella Mosca Ducrot作)ほか、この駅に関与した現代アーティストたちの名と作品名はanm (azienda napoletana mobilità) のオフィシャルサイトにすべて公開されている。[http://www.anm.it/index.php?option=com\\_content&task=view&id=103&Itemid=180](http://www.anm.it/index.php?option=com_content&task=view&id=103&Itemid=180) (他の1号線駅の作品リストも同様に公開されていて、PDFのガイド冊子もダウンロードできるようになっている)。
- (10) これらの駅にある現代アート作品の写真はこちらに掲示した: 河村英和「さすがイタリア! 美術館のような地下鉄の駅7選」<https://allabout.co.jp/gm/gc/462407/> (更新日: 2016年5月17日)。
- (11) トレド駅的设计はスペイン建築家オスカル・トゥスケッツによるもので、古(いにしえ)のナポリ人の風俗をモチーフにしたモザイク壁画(改札付近とエスカレータ入口付近の壁)は、南アフリカ出身のウィリアム・ケントリッジWilliam Kentridgeが担当した。駅の外に置かれている鑄鉄製のモダンな騎馬像も彼の作品である。この駅には、治安が比較的悪いスペイン地区に出る入口(Montecalvario方面出口)もあり、ここには顔写真をコラージュしたOliviero Toscaniの作品でできた壁画のある地下道もあるが、現在ここは閉鎖されている。
- (12) つまり、このときナポリの画商Lucio Amelioがナポリにウォーホルを招聘して展覧会を企画したのだが、このときのナポリ滞在からインスパイアされて制作したのがアンディ・ウォーホルの有名な噴火するヴェスヴィオ山の版画で、複数バージョンあるうち一枚はナポリの国立カポディモンテ美術館も収蔵している。
- (13) 10点の作品の作者と題名はここにリストアップされている: [https://www.vesuvioinrete.it/e\\_creatorvesevo.htm](https://www.vesuvioinrete.it/e_creatorvesevo.htm)
- (14) このホテルで行われた展覧会での写真ははこちらに掲示した: 河村英和「ナポリの守護聖人サン・ジェンナーロと観光スポット」<https://allabout.co.jp/gm/gc/444277/2/> (更新日: 2014年6月30日)。
- (15) バンクシーはブリストル生まれで、1999年ブリストルの東部バートンヒル(Barton Hill)地区のグラフィティ仲間とともに活動を始めた(タビエス, 2018, 2)。1980年代のヒップホップ文化のアメリカで確立していたスプレーとステンシルを使って非合法に描いてゆく手法で、1999年にはロンドンへ進出し活動を広めてゆき(ポッター, 2013, 16-17)、2005年にはイギリス全土でその名を轟かせはじめた。そしてカリフォルニアのディズニールランドにグアタンナモ捕虜収容所の囚人の人形を無断で展示したのを皮切りに、作品の高騰化もはじまった(タビエス, 2018, 26)。
- (16) ナポリの次にイタリアで発見されたバンクシー作品はヴェネツィアにある。2019年バンクシーは、長年オーバーツーリズム問題に悩む

この水の都にやってくる超大型クルーズ船の姿を、18世紀の画家カナレット風に描いた絵を切り売りして街頭販売するというパフォーマンスを行い、警官に許可のない路上販売はダメだと言われて店を畳んでゆくというビデオを公開したが、その時期にあわせて、水際に面したヴェネツィアの建物にバンクシーのステンシル作品が忽然と現れている。

- (17) 近年はついにカプリ島まで、ストリートアートの波が押し寄せてきた。ここも清潔感溢れる白漆喰で塗られたヴァナキュラーな地中海建築の民家がある点で共通している場所で、カプリにはラグジュアリーな店舗も並んでいて、きつい色調で描かれがちな大都市郊外で育ってきたストリートアートは正直不釣り合いである。そのため2014年の秋に行われたカプリ初のストリートアートイベントでは、島の雰囲気配慮し、モノトーン系の壁画2点 (Ozmo作とEron作) が披露されていた (Villa, 2014)。
- (18) 父はナポリ人、母はオランダ人なのでオランダ語的にもイタリア語的にも「ヨリット」と発音するほうが正しいのだが、ナポリでは「ジョリット」と呼ばれていることも多い。
- (19) ヨリットのカラヴァッジョ崇拜は、2019年12月25日のフェイスブック投稿でクリスマスの挨拶にかえ、カラヴァッジョの《聖母子 Madonna dei Palafrenieri》(1606年、ローマ・ボルゲーゼ美術館収蔵) の画像を載せていることから窺い知ることができる。
- (20) パルコ・メロラの「壁画地区」の整備を進めている組織は、「INWARD: Osservatorio sulla Creatività Urbana」とUnar (Ufficio nazionale antidiscriminazioni razziali del Dipartimento delle Pari Opportunità della Presidenza del Consiglio dei Ministri) である。
- (21) マラドーナは、1980年代から90年代にかけてナポリのサッカーチームに所属しており、のちにナポリの中心部にある旧市街のパール(飲食店)の外壁には、聖母マリアを奉るがごとく、マラドーナの祠がつくられていたほどだ。
- (22) ヨリット本人の当該フェイスブックページ: [https://www.facebook.com/JoritGraffiti/posts/1685299191616262?comment\\_id=1686763468136501&comment\\_tracking=%7B%22tn%22%3A%22R%22%7D](https://www.facebook.com/JoritGraffiti/posts/1685299191616262?comment_id=1686763468136501&comment_tracking=%7B%22tn%22%3A%22R%22%7D) (2020年1月1日閲覧)
- (23) カンパーニア州の各県から一名ずつ選ばれていて、ナポリ県ナポリ生まれボクサーのPatrizio Olivaをはじめ、サッカー選手ではアヴェリーノ県出身Fernando De Napoliとベネヴェント県出身のCarmelo Imbriani、サレルノ県からは走高跳のAntonietta De Martino、カゼルタ県ではバスケットボール選手のFerdinando Gentileが選ばれた。
- (24) Parco dei murali (壁画住宅区) のオフィシャルサイトの作品紹介ページ: <http://www.parcodemurali.it/arte/opere/> (2020年1月1日閲覧)
- (25) Marco Burrelli (1977年フィレンツェ生まれ) ことZed1は、すでにイタリアを代表する有名なストリートアート壁画家。参照: <https://www.widewalls.ch/artist/zed1/> (2020年1月2日閲覧)
- (26) Rosk&Lostは、二人のカルタニセッタ(シチリア)出身のMaurizio Giulio Rosk Gebbia (1988生まれ) とMirko Loste Cavallotto, classe (1987生まれ) から成るストリートアート壁画家。Inwardのオフィシャルサイトのアーティスト紹介ページを参照: <http://www.parcodemurali.it/arte/archivio-artisti/roskloste/> (2020年1月2日閲覧)
- (27) カリアリ(サルデーニャ)出身のアーティスト。Inwardのオフィシャルサイトのアーティスト紹介ページを参照: <http://www.parcodemurali.it/arte/archivio-artisti/la-fille-bertha/> (2020年1月2日閲覧)
- (28) Inwardのオフィシャルサイトの壁画解説ページを参照: <http://www.inward.it/attivita/a-mamm-e-tutt-e-mamm-di-la-fille-bertha> (2020年1月1日閲覧)
- (29) プーリア州トリッジャーノ出身1982年生まれ。Inwardのオフィシャルサイトのアーティスト紹介ページを参照: <http://www.parcodemurali.it/arte/archivio-artisti/daniele-hope-nitti/> (2020年1月2日閲覧)
- (30) Inwardのオフィシャルサイトの壁画解説ページを参照: <http://www.parcodemurali.it/arte/archivio-opere/je-sto-vicino-a-te/> (2020年1月1日閲覧)
- (31) 「Luca Zeus40 Caputo」はナポリ出身の1980年生まれのスプレー壁画家で、2000年より活動を開始。Inwardのオフィシャルサイトのアーティスト紹介ページを参照: <http://www.parcodemurali.it/arte/archivio-artisti/zeus40/> (2020年1月2日閲覧)
- (32) ボソレッティは自身のオフィシャルサイト (<https://bosoletti.com>) とフェイスブックページ (<https://www.facebook.com/bosoletti/>) で作品紹介を行っている。
- (33) <https://www.viaggiapiccoli.com/napoli-murali-rione-sanita/> を参照 (2020年1月9日閲覧)
- (34) その目の前の立地には1990年に作成された聖母の壁画 (Salvatore Iodoce作) がある (Perillo, 2017)。
- (35) <http://www.travelnaples.it/blog/napoli-street-art/street-art-tour-bosoletti-napoli/> を参照 (2020年1月9日閲覧)
- (36) <https://artcollection.ferrarelle.it/collection/roxy-in-the-box> を参照 (2020年1月9日閲覧)
- (37) 春から夏までがリゾートのハイシーズンであるカプリ島では、冬季は高級ブランド店はすべて閉店しており、クリスマスから新年にかけて、使用されていないショッポのショーウィンドウを活用したアートイベントである。
- (38) Velter, A. (2014). *Ernest Pignon-Ernest*, Paris, Gallimardの表紙。
- (39) 『L'Amica geniale』の邦訳は『リラとわたしーナポリの物語1』(飯田亮介訳、早川書房、2018年) という題で刊行されている。
- (40) 2019年には専用のフェイスブックページも開設されている: <https://www.facebook.com/rionedemurali/>
- (41) 1994年4月夜9時半ごろミラノからナポリ空港に到着して間もない一人旅の77歳の日本人男性が、地下鉄ジャントゥルコ駅付近で、盗難を目的としたと推定される何者かによって、こん棒で頭部を打たれ死亡する事件が起こった。Marino, G., *Napoli, turista giapponese massacrato a bastonate*, in La Repubblica, articolo dell'11 aprile 1994, <https://ricerca.repubblica.it/repubblica/archivio/repubblica/1999/04/11/napoli-turista-giapponese-massacrato-bastonate.html>
- (42) ポッターの本には全ページにわたってページ数がふられていないので、筆者が換算したページ数を記載。
- (43) ファッションブランドのDolce&Gabbanaは、2016-17年秋冬コレクションのためのプロモーション・ビデオの作成を、ナポリの猥雑な

下町エリアで行っているし (Morra, 2017)、2019年9月はナポリ出身のアーティスト、ルーカ・カルネヴァーレ Luca Carnevaleによる、アメコミ風のスーパーマンに扮したナポリの聖人サン・ジェンナーロの絵 (Luca Carnevale作) が、ジロラミニニ教会近くの路地 (vico dei Maiorani) に展示されるも、わずかに12時間で盗まれて持ち去られてしまった事件もあり (Morra, 2019)、ナポリは現代アートの世界で今まさに最先端を走り始めているのかもしれない。

## 参考文献

- ・ Forte, F.; Lauda, L.; Zerlenga, O. (2018). *Street Art in Naples in the Territory of the 8th Municipality*, in XVII EGA International Conference 2018, Berlin, Springer, pp. 1-10.
- ・ Garofalo, V. (2018). *Rappresentare il cambiamento. Street art e rigenerazione urbana a Palermo*, in La città altra. Storia e immagine della diversità urbana: luoghi e paesaggi, Napoli, Federico II University Press, pp. 1151-1160.
- ・ Lauda, L.; Zerlenga, O. (2018). *La Città Altra nel disegno delle e sulle Vele di Scampia*, in La città altra. Storia e immagine della diversità urbana: luoghi e paesaggi, Napoli, Federico II University Press, pp. 1175-1184.
- ・ Palermo, L. (2017). *Crea-at(t)iva-mente(). Agire con l'arte per rigenerare spazi urbani*, in La città, il viaggio, il turismo. Percezione, produzione e trasformazione, Napoli, CIRICE, pp. 2797-2803.
- ・ Potter, P., et al. (2015). *BANKSY YOU ARE AN ACCEPTABLE LEVEL OF THREAT*, Tokyo, Parco Entertainment (邦訳: バトリック・ポッター、ギャリー・ショヴ編『Banksy you are an acceptable level of threat』(毛利嘉孝、鈴木杏子訳)、バルコエンタテインメント事業部、2013年)
- ・ Tapies, X. (2016). *Where's Banksy?: Banksy's Greatest Works in Context*, Berkeley, Gingko Press (邦訳: ザビエル・タビエス『バンクシー ビジュアル・アーカイブ』(和田侑子訳)、グラフィック社、2018年)
- ・ Zerlenga, O. (2017). *Imaging Naples Today. The Urban-Scale Construction of the Visual Image*, in Proceedings of International and Interdisciplinary Conference IMMAGINI?, Brixen, 13 pp.

## 参考サイト

- ・ Bertasi, G. (2019). *Venezia, compare un murales e (forse) è di Banksy*, in Corriere del Veneto, articolo del 14 maggio, [https://corrieredelveneto.corriere.it/veneziamestre/cultura-tempo-libero/19\\_maggio\\_14/venezia-compare-murales-forse-banksy-71c70966-761e-11e9-b1ca-7e6aa7b5d2e8.shtml](https://corrieredelveneto.corriere.it/veneziamestre/cultura-tempo-libero/19_maggio_14/venezia-compare-murales-forse-banksy-71c70966-761e-11e9-b1ca-7e6aa7b5d2e8.shtml)
- ・ Bottone, A. (2016). *Ponticelli, la nuova opera nel «parco dei murales»*, in Il Mattino.it, articolo del 10 febbraio, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/ponticelli\\_la\\_nuova\\_opera\\_parco\\_murales-1542697.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/ponticelli_la_nuova_opera_parco_murales-1542697.html) (consultato il 31 dicembre 2019)
- ・ Bottone, A. (2018a). *Street art, Jorit dona la seconda opera al Bronx*, in Il Mattino.it, articolo del 17 marzo, [https://www.ilmattino.it/napoli/cultura/street\\_art\\_jorit\\_dona\\_la\\_seconda\\_opera\\_al\\_bronx-3612580.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cultura/street_art_jorit_dona_la_seconda_opera_al_bronx-3612580.html) (consultato il 31 dicembre 2019)
- ・ Bottone, A. (2018b). *Napoli, ultimata la settima opera nel Parco dei Murales a Ponticelli*, in Il Mattino.it, articolo del 6 aprile, [https://www.ilmattino.it/napoli/cultura/ponticelli\\_ultimata\\_la\\_settima\\_opera\\_parco\\_murales-3651903.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cultura/ponticelli_ultimata_la_settima_opera_parco_murales-3651903.html) (consultato il 31 dicembre 2019)
- ・ Bottone, A. (2018c). *Parco dei Murales di Ponticelli, Zeus40 firma l'ultima opera nel distretto di arte urbana*, in Il Mattino.it, articolo del 24 luglio, [https://www.ilmattino.it/napoli/citta/parco\\_murales\\_di\\_ponticelli\\_zeus40\\_firma\\_ultima\\_opera\\_distretto\\_di\\_arte\\_urbana-3874481.html](https://www.ilmattino.it/napoli/citta/parco_murales_di_ponticelli_zeus40_firma_ultima_opera_distretto_di_arte_urbana-3874481.html)
- ・ Caragliano, R. (2010). *Leoni d'artista in piazza dei Martiri*, in la Repubblica Napoli it., articolo del 6 dicembre, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2010/12/06/news/leoni\\_d\\_artista\\_in\\_piazza\\_dei\\_martiri-9904124/](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2010/12/06/news/leoni_d_artista_in_piazza_dei_martiri-9904124/) (consultato il 31 dicembre 2019)
- ・ Carotenuto, G. (2019). *Napoli. Il Rione dei Murales nel segno dell'Amica Geniale. Un'opera di riqualificazione artistica e rigenerazione sociale nel Rione Luzzatti-Ascarelli*, in è campania, articolo del 8 luglio, <https://www.ecampania.it/napoli/itinerari/napoli-rione-murales-nel-segno-amica-geniale> (consultato il 25 dicembre 2019)
- ・ Cennamo, C. (2019). *Napoli, il Natale si accende di colori: a Chiaia le sculture luminose di Lello Esposito*, in Il Mattino.it, articolo del 15 novembre, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/napoli\\_natale\\_luci\\_lello\\_esposito-4865154.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/napoli_natale_luci_lello_esposito-4865154.html) (consultato il 25 dicembre 2019)
- ・ Chetta, A. (2015). *Una bimba rom gigante dove bruciarono i campi nomadi*, in Corriere del Mezzogiorno, articolo del 20 maggio, [https://corrieredelmezzogiorno.corriere.it/napoli/arte\\_e\\_cultura/15\\_maggio\\_20/bimba-rom-gigante-dove-bruciarono-campi-nomadi-18823cf4-ff17-11e4-9301-c6b069d695a4.shtml](https://corrieredelmezzogiorno.corriere.it/napoli/arte_e_cultura/15_maggio_20/bimba-rom-gigante-dove-bruciarono-campi-nomadi-18823cf4-ff17-11e4-9301-c6b069d695a4.shtml) (consultato il 31 dicembre 2019)
- ・ Compagnone, S. (2003). *In scena al San Carlo 'L'Olandese volante' disegnato da Adami*, in la Repubblica, articolo del 20 marzo, <https://ricerca.repubblica.it/repubblica/archivio/repubblica/2003/03/16/in-scena-al-san-carlo-olandese.html> (consultato il 31 dicembre 2019)
- ・ Coppola, V. (2015). *L'arte salva Napoli: arriva il murales dedicato alla sirena Pathenope*, in Vesuviolive, articolo del 23 luglio, <https://www.vesuviolive.it/ultime-notizie/103225-larte-salva-napoli-arriva-il-murales-dedicato-alla-sirena-pathenope/> (consultato il 9 gennaio 2020)
- ・ Cundari, U.; Crimaldi, G. (2018). *Napoli, Jorit aggredito da consigliere Fdi: «Ma completerò il murales»*, in Il Mattino.it, articolo dell'11 ottobre, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/napoli\\_jorit\\_aggredito\\_consigliere\\_fdi\\_completeremo\\_murales-4030971.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/napoli_jorit_aggredito_consigliere_fdi_completeremo_murales-4030971.html) (consultato

il 31 dicembre 2019)

- De Luca, P. (2013). *Napoli, in mostra i "San Gennaro" e i "corni" dell'artista Lello Esposito*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 15 maggio, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2013/05/15/foto/napoli\\_in\\_mostra\\_i\\_corni\\_dell\\_artista\\_lello\\_esposito-58832919/1/#1](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2013/05/15/foto/napoli_in_mostra_i_corni_dell_artista_lello_esposito-58832919/1/#1) (consultato il 9 gennaio 2020)
- De Luca, P. (2014). *Le "opere di strada" di Ernest Pignon-Ernest*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 6 marzo, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2014/03/06/news/le\\_opere\\_di\\_strada\\_di\\_ernest\\_pignon-ernest-80331609/](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2014/03/06/news/le_opere_di_strada_di_ernest_pignon-ernest-80331609/) (consultato il 9 gennaio 2020)
- De Luca, P. (2015). *I volti di star e artisti ritratti da Roxy in the Box nel suo progetto di street art ai Quartieri Spagnoli*, in la Repubblica a (Napoli), articolo del 1 ottobre, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/10/01/foto/i\\_volti\\_di\\_star\\_e\\_e\\_artisti\\_ritratti\\_da\\_roxy\\_in\\_the\\_box\\_nel\\_suo\\_progetto\\_di\\_street\\_art\\_ai\\_quartieri\\_spagnoli-124051296/1/#1](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/10/01/foto/i_volti_di_star_e_e_artisti_ritratti_da_roxy_in_the_box_nel_suo_progetto_di_street_art_ai_quartieri_spagnoli-124051296/1/#1) (consultato il 9 gennaio 2020)
- De Luca, P. (2017). *Maradona ma non solo: ai Quartieri Spagnoli di fronte al murale del Pibe de Oro ecco la "Pudicizia"*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 30 settembre, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2017/09/30/foto/maradona\\_ma\\_non\\_solo\\_ai\\_quartieri\\_spagnoli\\_di\\_frente\\_al\\_pibe\\_de\\_oro\\_il\\_murale\\_della\\_pudicizia\\_-176942997/1/#1](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2017/09/30/foto/maradona_ma_non_solo_ai_quartieri_spagnoli_di_frente_al_pibe_de_oro_il_murale_della_pudicizia_-176942997/1/#1) (consultato il 9 gennaio 2020)
- De Luca, P. (2019a). *Jorit: murale al Centro Direzionale, prende forma il volto di Patrizio Oliva*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 16 maggio, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/05/16/foto/jorit\\_murale\\_al\\_centro\\_direzionale\\_prende\\_forma\\_il\\_volto\\_di\\_patrizio\\_oliva-226430227/1/#1](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/05/16/foto/jorit_murale_al_centro_direzionale_prende_forma_il_volto_di_patrizio_oliva-226430227/1/#1) (consultato il 9 gennaio 2020)
- De Luca, P. (2019b). *Napoli, un murale di 20 metri ispirato a "L'amica geniale": Lenuccia e Lila al rione Luzzatti*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 17 giugno, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/06/17/news/napoli\\_un\\_murale\\_di\\_15\\_metri\\_iscirato\\_all\\_amica\\_geniale\\_lenuccia\\_e\\_lila\\_al\\_rione\\_luzzatti-228985896/](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/06/17/news/napoli_un_murale_di_15_metri_iscirato_all_amica_geniale_lenuccia_e_lila_al_rione_luzzatti-228985896/) (consultato il 6 gennaio 2020)
- De Rosa, A.L. (2015). *Il San Gennaro operaio di Jorit per far rinascere Forcella*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 16 settembre, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/09/16/news/il\\_san\\_gennaro\\_operaio\\_di\\_jorit\\_per\\_far\\_rinascere\\_forcella-122978158/](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/09/16/news/il_san_gennaro_operaio_di_jorit_per_far_rinascere_forcella-122978158/) (consultato il 6 gennaio 2020)
- De Simone, O. (2016a). *«Resis-ti-amo», inaugurato il murales di Bosoletti alla Sanità*, in Il Mattino.it, articolo del 5 aprile, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/inaugurato\\_il\\_murales\\_di\\_francisco\\_bosoletti\\_alla\\_sanita-1650361.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/inaugurato_il_murales_di_francisco_bosoletti_alla_sanita-1650361.html) (consultato il 6 gennaio 2020)
- De Simone, O. (2016b). *Napoli. Materdei, l'artista Blu completa il suo murales sulle pareti dell'ex OPG*, in Il Mattino.it, articolo del 15 aprile, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/materdei\\_l\\_artista\\_blu\\_completa\\_il\\_suo\\_murales\\_sulle\\_pareti\\_dell\\_ex\\_opg-1669587.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/materdei_l_artista_blu_completa_il_suo_murales_sulle_pareti_dell_ex_opg-1669587.html) (consultato il 6 gennaio 2020)
- Elefante, M. (2016). *«Banksy e Napoli, salvaguardiamo la Madonna con pistola»*, in Il Mattino.it, articolo del 3 settembre, [https://www.ilmattino.it/napoli/citta/banksy\\_e\\_napoli\\_viaggio\\_nella\\_street\\_art-1944822.html](https://www.ilmattino.it/napoli/citta/banksy_e_napoli_viaggio_nella_street_art-1944822.html) (consultato il 2 gennaio 2020)
- Esposito La Rossa, R. (2019). *Scampia, murales pacifisti sullo stadio Landieri*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 1 marzo, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/02/01/news/scampia\\_murales\\_pacifisti\\_sullo\\_stadio\\_landieri-220393828/](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/02/01/news/scampia_murales_pacifisti_sullo_stadio_landieri-220393828/) (consultato il 9 gennaio 2020)
- Ingegno, A. (2010). *Coperta l'opera di Banksy, valeva centomila dollari*, in Corriere del Mezzogiorno, articolo del 26 maggio, [https://corrieredelmezzogiorno.corriere.it/bari/notizie/arte\\_e\\_cultura/2010/26-maggio-2010/coperta-l-opera-banksy-via-croce-aveva-valore-100-mila-dollari--1703086132235.shtml](https://corrieredelmezzogiorno.corriere.it/bari/notizie/arte_e_cultura/2010/26-maggio-2010/coperta-l-opera-banksy-via-croce-aveva-valore-100-mila-dollari--1703086132235.shtml) (consultato il 3 gennaio 2020)
- Mastropaolo, R. (2016). *Street Art a Napoli: San Gennaro e Caravaggio di Roxy in The box*, in napolidavivere, articolo del 21 settembre, <https://www.napolidavivere.it/2016/09/20/street-art-a-napoli-san-gennaro-e-caravaggio-di-roxy-in-the-box/> (consultato il 9 gennaio 2020)
- Mendolla, W. (2019). *Napoli, Natale con i lupi di Ruowang. Polemica social: regalo inquietante*, in Corriere del Mezzogiorno, articolo del 12 novembre, [https://corrieredelmezzogiorno.corriere.it/napoli/cronaca/19\\_novembre\\_12/napoli-natale-lupi-ruowang-polemica-social-regalo-inquietante-1604d0c8-0524-11ea-a3d5-8384b70285ca.shtml](https://corrieredelmezzogiorno.corriere.it/napoli/cronaca/19_novembre_12/napoli-natale-lupi-ruowang-polemica-social-regalo-inquietante-1604d0c8-0524-11ea-a3d5-8384b70285ca.shtml) (consultato il 31 dicembre 2019)
- Monaco, F. (2018). *San Giovanni a Teduccio, inaugurato il murale di Che Guevara*, in 2Anews.it, articolo del 23 settembre, <https://www.2anews.it/attualita/san-giovanni-a-teduccio-inaugurato-il-murale-di-che-guevara.html> (consultato l'8 gennaio 2020)
- Mormone, L.M. (2019). *Ponticelli: la stazione della Circumvesuviana è "invasa" dalla Street Art*, in 2Anews.it, articolo del 13 giugno 2019, <https://www.2anews.it/ultime-notizie-di-cronaca/ponticelli-la-stazione-della-circumvesuviana-e-invasa-dalla-street-art.html> (consultato l'8 gennaio 2020)
- Morra, G. (2017). *Spot Dolce & Gabbana girati a Napoli: è bufera. «Soliti cliché». «No, romantico folclore»*, in Il Mattino.it, articolo del 4 settembre, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/gli\\_spot\\_dolce\\_gabbana\\_girati\\_napoli\\_dividono\\_web\\_soliti\\_cliche\\_romantico\\_](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/gli_spot_dolce_gabbana_girati_napoli_dividono_web_soliti_cliche_romantico_)

[folclore\\_video-3219091.html](#) (consultato il 9 gennaio 2020)

- Morra, G. (2019). *Napoli, lo scandalo del murales di San Gennaro Superman: inaugurato e rubato nel giro di 12 ore*, in Il Mattino.it, articolo del 26 settembre, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/rubato\\_murales\\_dedicato\\_san\\_gennaro\\_superman\\_sparito\\_giro\\_di\\_12\\_ore-4759718.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/rubato_murales_dedicato_san_gennaro_superman_sparito_giro_di_12_ore-4759718.html) (consultato il 24 dicembre 2019)
- Napolitano, M.C. (2015). *Creator Vesevo, l'arte sulla strada per il Vesuvio*, in è campania, articolo del 6 ottobre, <https://www.ecampania.it/napoli/itinerari/creator-vesevo-l-arte-sulla-strada-vesuvio> (consultato il 9 gennaio 2020)
- Perillo, M. (2017). *Napoli. Svelato il mistero del murales ai Quartieri: Bosoletti dipinge la Pudicizia di cappella Sansevero*, in Il Mattino.it, articolo del 30 settembre, [https://www.ilmattino.it/napoli/cultura/svelato\\_il\\_mistero\\_del\\_murales\\_ai\\_quartieri\\_spagnoli\\_bosoletti\\_dipinge\\_la\\_pudicizia\\_di\\_cappella\\_sansevero-3272206.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cultura/svelato_il_mistero_del_murales_ai_quartieri_spagnoli_bosoletti_dipinge_la_pudicizia_di_cappella_sansevero-3272206.html) (consultato il 6 gennaio 2020)
- Perillo, M. (2019). *Scampia, spunta il volto di Pasolini: il murales di Jorit vicino alla metro*, in Il Mattino.it, articolo del 7 gennaio, [https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/scampia\\_spunta\\_il\\_volto\\_di\\_pasolini\\_il\\_murales\\_di\\_jorit\\_vicino\\_alla\\_metro-4215162.html](https://www.ilmattino.it/napoli/cronaca/scampia_spunta_il_volto_di_pasolini_il_murales_di_jorit_vicino_alla_metro-4215162.html) (consultato il 31 dicembre 2019)
- Raicaldo, P. (2019). *Capri, la nuova vita della vetrine: per Natale diventano museo d'arte*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 10 dicembre, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/12/10/foto/capri\\_la\\_nuova\\_vita\\_della\\_vetrine\\_per\\_natale\\_diventano\\_museo\\_d\\_arte-243065453/1/#17](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2019/12/10/foto/capri_la_nuova_vita_della_vetrine_per_natale_diventano_museo_d_arte-243065453/1/#17) (consultato il 9 gennaio 2020)
- Ruberto, A. (2018). *Festa a San Giovanni a Teduccio, inaugurato il murales di Che Guevara realizzato da Jorit*, in Il Mattino.it, articolo del 23 settembre, [https://www.ilmattino.it/napoli/citta/napoli\\_san\\_giovanni\\_peduccio\\_murale\\_che\\_guevara\\_jorit\\_bronx-3990912.html](https://www.ilmattino.it/napoli/citta/napoli_san_giovanni_peduccio_murale_che_guevara_jorit_bronx-3990912.html) (consultato il 31 dicembre 2019)
- Urbani, I. (2012). *Centro storico c'è una statua: è di Pulcinella*, in la Repubblica, articolo del 23 novembre, <https://ricerca.repubblica.it/repubblica/archivio/repubblica/2012/11/23/centro-storico-ce-una-statua-di-pulcinella.html> (consultato il 9 gennaio 2020)
- Villa, T. (2014). *Capri, isola d'arte*, in Corriere della Sera, articolo del 16 settembre, [http://living.corriere.it/tendenze/arte/capri-mostra-art-5030001530/?refresh\\_ce-cp](http://living.corriere.it/tendenze/arte/capri-mostra-art-5030001530/?refresh_ce-cp) (consultato il 9 gennaio 2020)
- Zagaria, C. (2015a). *Il diritto al gioco per i bambini della generazione 2.0. Nuovo murales a Ponticelli*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 14 luglio, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/07/14/news/il\\_diritto\\_al\\_gioco\\_per\\_i\\_bambini\\_della\\_generazione\\_2\\_0\\_nuovo\\_murales\\_a\\_ponticelli-119042519/](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/07/14/news/il_diritto_al_gioco_per_i_bambini_della_generazione_2_0_nuovo_murales_a_ponticelli-119042519/) (consultato il 2 gennaio 2020)
- Zagaria, C. (2015b). *“Chi è amato, non dimentica”, Ponticelli quartiere della street art*, in la Repubblica (Napoli), articolo del 27 luglio, [https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/07/27/news/chi\\_e\\_amato\\_non\\_dimentica\\_ponticelli\\_quartiere\\_della\\_street\\_art-119906080/](https://napoli.repubblica.it/cronaca/2015/07/27/news/chi_e_amato_non_dimentica_ponticelli_quartiere_della_street_art-119906080/) (consultato il 2 gennaio 2020)
- Zorsi, A. (2019). *Murales a Venezia, Banksy indagato e archiviato. «La sua è un'opera d'arte»*, in Corriere del Veneto, articolo del 24 luglio, [https://corrieredelveneto.corriere.it/veneziamestre/cronaca/19\\_luglio\\_24/murales-veneziamestre-banksy-indagato-archiviato-la-sua-un-opera-d-arte-6e2e8ca8-add1-11e9-bb8a-df33d0573529.shtml](https://corrieredelveneto.corriere.it/veneziamestre/cronaca/19_luglio_24/murales-veneziamestre-banksy-indagato-archiviato-la-sua-un-opera-d-arte-6e2e8ca8-add1-11e9-bb8a-df33d0573529.shtml) (consultato il 2 gennaio 2020)